一般財団法人米子市文化財団
埋蔵文化財発掘調査報告書 20

鳥取県米子市

青木宮埼遺跡

２０２０
一般財団法人　米子市文化財団

序

当財団では、令和元年度に鳥取県の委託を受け、尚徳２地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い青木宮埼遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、狭長な調査範囲であるにも関わらず、竪穴建物跡の存在が10棟想定され、周辺に集落が展開したと考えられます。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『青木宮埼遺跡』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました鳥取県西部総合事務所米子県土整備局ならびに関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

一般財団法人　米子市文化財団

理　事　長　　杉　原　弘一郎

例　　言

１．本報告書は、鳥取県が計画する尚徳２地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、令和元年度に米子市青木地内で実施した青木宮埼遺跡の発掘調査報告書である。
２．発掘調査は、鳥取県の委託を受けて一般財団法人　米子市文化財団が実施した。
３．本報告書における方位は公共座標北を示し、Ｘ、Ｙの数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。また、レベルは海抜標高を示す。
４．本報告書に掲載した地図は､国土地理院発行の１/50,000地形図「米子」､米子市作成の１/2500「米子市都市計画図」、及び鳥取県西部総合事務所米子県土整備局作成の１/500「尚徳２地区急傾斜地崩壊対策工事平面図」を加筆して使用した。
５．出土遺物を整理、評価するにあたり、石製品の石材鑑定については鳥取県地域づくり推進部文化財局文化財課　高橋章司氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
６．本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人　米子市文化財団　埋蔵文化財調査室で行った。
７．本報告書で使用した遺構、遺物写真は調査担当職員が撮影した。
８．本報告書の執筆及び編集は、高橋が行った。
９．発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市文化振興課で保管している。

凡　　例

１．遺跡の略称は「ＡＫＭ」とした。
２．本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。
　　土器：１/３　石製品：１/１
３．本文中、挿図中、遺物観察表中及び写真図版中の遺物番号は一致する。
４．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
５．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2
　第４節　調査体制 …… 2

第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の概要
　第１節　調査の方法 …… 9
　第２節　遺跡の立地 …… 9
　第３節　検出した遺構と遺物
　　１．１区調査区 …… 9
　　２．２区調査区 …… 12
　　３．３区調査区 …… 15
　　４．４区調査区 …… 18
　　５．５区調査区 …… 21
　第４節　遺構外出土遺物 …… 21

第４章　総　　括 …… 23

遺物観察表 …… 25

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　調査地位置図 …… 3
第３図　周辺遺跡分布図 …… 8
第４図　調査区配置図 …… 10
第５図　１区　平・断面図 …… 11
第６図　ＳＩ10遺構図 …… 12
第７図　２区　平・断面図 …… 13
第８図　ＳＩ１遺構図 …… 14
第９図　ＳＩ１出土遺物図 …… 15
第10図　３区　平・断面図 …… 16
第11図　ＳＩ２～５遺構図 …… 17
第12図　ＳＩ６遺構図 …… 18
第13図　４区　平・断面図 …… 19
第14図　ＳＩ７遺構図 …… 20
第15図　ＳＩ８遺構図及び出土遺物図 …… 20
第16図　ＳＩ９遺構図 …… 21
第17図　Ｐ23出土遺物図 …… 21
第18図　遺構外出土遺物図 …… 21
第19図　５区　平・断面図 …… 22
第20図　青木遺跡の古墳時代中期後葉の遺構分布図 …… 24

挿　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 7
第２表　ＳＩ１出土土器観察表 …… 25
第３表　ＳＩ１出土石製品観察表 …… 25
第４表　ＳＩ８出土遺物観察表 …… 25
第５表　Ｐ23出土遺物観察表 …… 25
第６表　遺構外出土遺物観察表 …… 25

写　真　図　版　目　次

図版１　調査地遠景（南西から）
　　土取りによって切断された丘陵先端部
図版２　１区調査前状況（北西から）
　　２～５区調査前状況（南から）
図版３　１区全景（南東から）
　　１区全景（北西から）
図版４　１区土層
　　ＳＩ10（東から）
図版５　２区全景（南から）
　　２区全景（北から）
図版６　ＳＩ１（東から）
　　ＳＩ１ｂ　中央ピット（西から）
図版７　３区全景（南から）
　　３区全景（北から）
図版８　ＳＩ２～５検出状況（北から）
　　ＳＩ２～５完掘状況（北から）
図版９　３区及びＳＩ２～５土層
　　ＳＩ６（東から）
図版10　４区全景（南から）
　　４区全景（北から）
図版11　ＳＩ７（北西から）
　　ＳＩ８（東から）
図版12　ＳＩ９（西から）
　　Ｐ23遺物出土状況
　　５区全景（北から）
図版13　ＳＩ１出土遺物
　　ＳＩ８出土遺物
　　Ｐ23出土遺物
図版14　遺構外出土遺物（１）
　　遺構外出土遺物（２）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市青木地内において計画された尚徳２地区単県急傾斜地崩壊対策工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

工事対象地は、周知の遺跡である青木遺跡として認識されており、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じた。米子市文化振興課が平成30年度に実施した試掘調査では、竪穴建物跡と溝状遺構が検出され、土師器と須恵器が出土した。

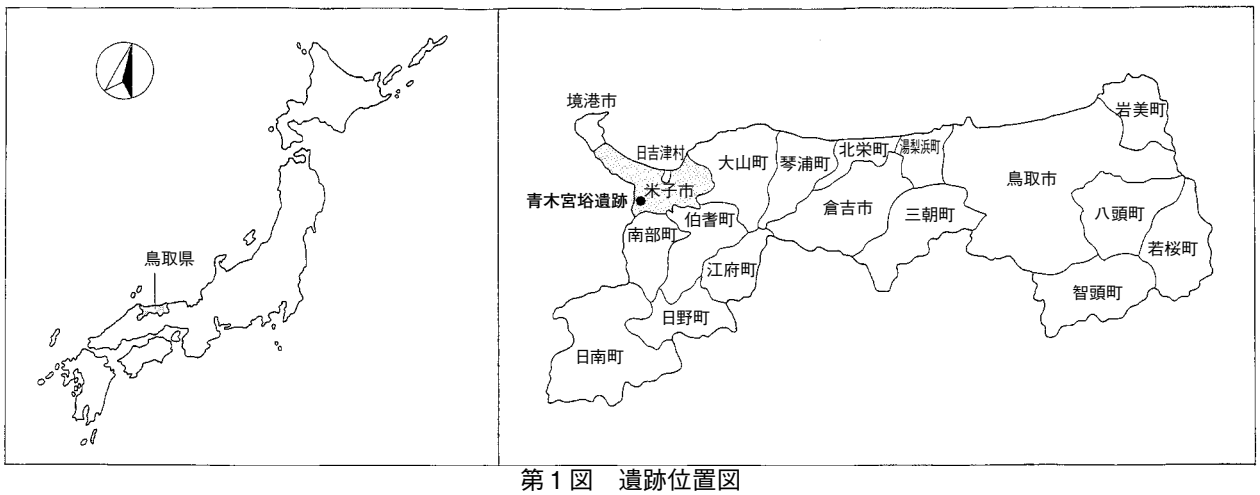
この結果を受け、鳥取県西部総合事務所と米子市文化振興課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、鳥取県は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、当財団は、平成31年４月15日付で鳥取県と契約をし、平成31年４月25日付で文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を鳥取県知事に提出し、それに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

第２節　調査の経過

発掘調査は、工事対象地の200㎡を対象とし、令和元年６月24日から令和元年８月９日までの期間で現地調査を行った。

調査日誌抄

６月24日	発掘器材搬入
	発掘作業員稼働開始
	調査地及び廃土置き場等の草刈り、伐開
６月25日～	発掘作業員稼働による表土・堆積層の掘削及び遺構検出
	１・２区調査開始
７月２日	１区調査終了、３区調査開始



第１図　遺跡位置図

７月３日　　１区埋め戻し
７月17日　　２・３区調査終了、４区調査開始
７月25日　　４区調査終了
７月29日～31日　２・３区埋め戻し
８月１日～２日　４区埋め戻し
８月５日　　５区調査開始
８月８日　　５区調査終了
８月９日　　５区埋め戻し、発掘器材撤収
　　調査終了

第３節　整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、令和元年度に実施した。出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行い、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施し、年度末に報告書を刊行した。

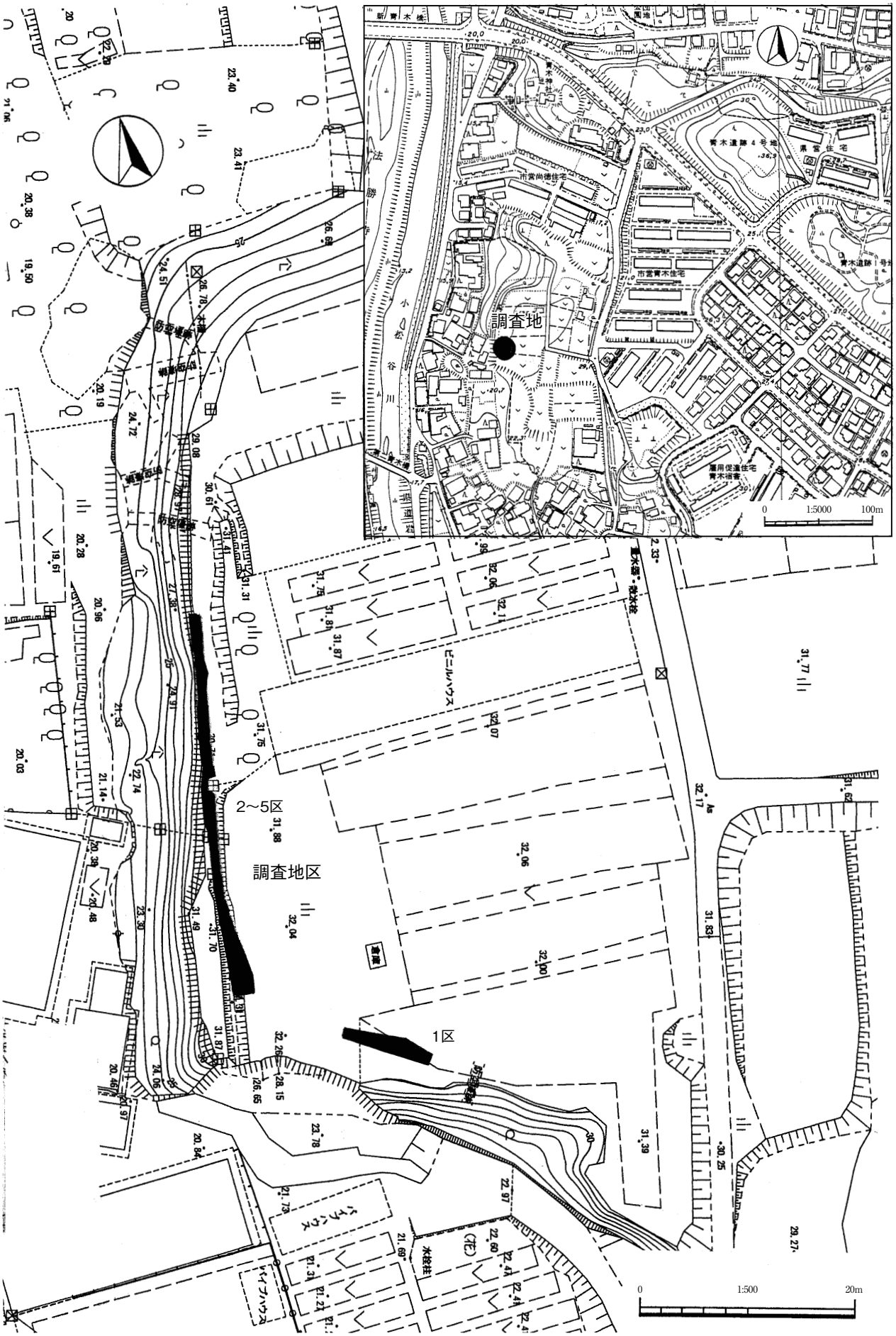
整理作業日誌抄

11月１日　整理作業開始
11月29日　整理作業終了
11月25日　報告書作成開始
３月26日　報告書作成終了

第４節　調査体制

事業主体　一般財団法人　米子市文化財団
　理　事　長　杉原弘一郎
　常務理事　先灘　達也（一般財団法人　米子市文化財団事務局長）
　埋蔵文化財調査室
　室長兼調査員　小原　貴樹
　次長兼統括調査員　佐伯　純也（令和元年７月31日まで）
　主　事　田中　昌子
事業担当　主任調査員　高橋　浩樹
　調査補助員　永登　朋子

指導・助言　米子市文化振興課・鳥取県地域づくり推進部文化財局



第２図　調査地位置図

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

米子市は、鳥取県の西端に位置する鳥取県西部の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。

地形的には、中国山地に源を発する日野川の沖積作用によって形成された米子平野を中心に、それを取り囲むようにしてその周縁部には大山、中国山地からつづくなだらかな山地や丘陵によって構成されている。さらに、米子平野は日野川によって形成された扇状地性の沖積地である日野川扇状地を中心にして、その北側の低地と発達した２条の砂州からなる日吉津低地、南西側の法勝寺川によって形成された沖積世の河谷低地である法勝寺川埋積谷低地（法勝寺平野)、西側の米子市街地の大部分をのせる米子低地（沖積地）からなっている。また。北西には日野川からの流出土砂が北西の季節風や沿岸流の影響で堆積し、これによって形成された弓浜半島が南北にのび、その西側にはこの半島によって外海と遮断されて形成された汽水湖の中海がある。

米子市は、弓浜半島南部から米子平野北部、そして大山北西麓にかけて市域が広がり、北は境港市、東は大山町、南東は伯耆町、南は南部町、西は島根県安来市とそれぞれ接している。

青木宮埼遺跡は、米子市南部の米子市青木に所在する。この地は米子市街地の南東約４㎞にあり、大規模な住宅団地である永江団地の西側に隣接する農村地帯である。

調査地は法勝寺川右岸の長者原台地と呼ばれる標高32ｍの丘陵の西端に立地し、眼下には法勝寺川と小松谷川が合流し、西側には法勝寺平野が開ける。調査地の東側は丘陵を切り開いて造成した住宅団地（永江団地）となっているが、調査地付近は丘陵を削平して造成した畑地が残る。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

周辺での人々の生活の痕跡は旧石器時代まで遡る。長者原台地の諏訪西山ノ後遺跡（21）では、大山テフラ層中から頁岩製のナイフ形石器が１点出土し、古墳の周溝からもナイフ形石器が出土している。また、坂長村上遺跡（58）では大山テフラの漸移層からであるが、黒曜石製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

縄文時代草創期には奈喜良遺跡（22)、陰田宮の谷遺跡（31)、吉谷亀尾ノ上遺跡（42)、福成石佛前遺跡（46)、境北井埼遺跡（44)、境矢石遺跡（45)、諸木遺跡（51)、坂長村上遺跡から尖頭器が出土している。

縄文時代早期には大山西麓に遺跡が集中しており、日野川左岸では当該期の遺跡は少なく、清水谷遺跡（48）で黄島式～高山寺式に比定される押型文土器、新山山田遺跡（38）で早期中葉の押型文土器が少量出土しているのみである。

早期末から前期になると中海沿岸で集落の形成が行われるようになり、このような遺跡には目久美

遺跡（４）、陰田第１遺跡（30）、陰田第７遺跡（27）、陰田第９遺跡（29）がある。目久美遺跡では当該期には土器とともに多量の石錘と動植物遺体が出土している。また、陰田第９遺跡では、轟式の影響を受けた土器が出土している。

中期には現在のところあまり明確ではないが、遺跡の数が減少する傾向にある。目久美遺跡では、この時期のドングリ貯蔵穴が多数確認されている。

後期には大山西麓や中海沿岸の低湿地に加えて米子平野南部の丘陵上にも遺跡が見られるようになる。この時期の遺跡には、目久美遺跡、陰田第１遺跡、陰田第７遺跡、古市河原田遺跡（40）、青木遺跡（16）などがあり、青木遺跡では多数の陥穴が確認されている。

晩期には目久美遺跡、青木遺跡、奈喜良遺跡、新山下山遺跡（36）、古市河原田遺跡などがあり、古市河原田遺跡からは晩期後葉の突帯文土器がまとまって出土している。

弥生時代

弥生時代になると海岸線が後退するとともに沖積が進み、低湿地にて農耕が開始される。

前期には、目久美遺跡では低湿地水田と微高地に営む集落が形成され、長砂第１遺跡（６）でも前期後葉～中期初頭の水田跡が確認されている。また、前期末～中期前葉には清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡（53）天王原遺跡（56）で断面Ｖ字状の環濠が確認されている。

中期には遺跡の数が増加し、その立地範囲も拡大し、丘陵や台地上、低湿地の微高地上、高原地域にも見られるようになる。目久美遺跡、長砂第２遺跡（７）は低湿地に立地する遺跡で、目久美遺跡では中期中葉～中期後葉と中期後葉～中期末の２面の水田跡が検出され、長砂第２遺跡でも前期末～中期前葉と中期後葉～後期の水田跡が確認されている。

後期には前期～中期の拠点的な集落は継続するものは少なく、中期後葉から後期にかけて青木遺跡、福市遺跡（15）、妻木晩田遺跡、越敷山遺跡群（61）のように新たに拠点的な集落が形成され、古墳時代へと継続する。また、中期後葉～後期には遺跡は低地から丘陵へ立地が移動する傾向にあり、このような遺跡には陰田第１遺跡、陰田第６遺跡（28）、吉谷銭神遺跡（41）などがあるが、これらは比較的短期間で廃絶する。

古墳時代

前期の古墳には日原６号墳（13）、普段寺１号墳・２号墳（54）などがある。日原６号墳は一辺21ｍの方墳で、箱形木棺３基、割竹形木棺１基、土壙墓２基が検出されている。普段寺１号墳は全長23ｍの前方後方墳で、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、碧玉製管玉、鉄剣が出土している。普段寺２号墳は直径22～23ｍの円墳と考えられ、三角縁四神四獣鏡が出土している。青木遺跡では小型の方墳10基と円墳７基からなる古墳群と、これらとの階層差を示す方形周溝墓群が確認され、福市遺跡日焼山地区では土壙墓群が検出されている。

前期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡などがあり、池ノ内遺跡（５）では水田跡が検出されている。

中期の古墳には陰田41号墳、水道山古墳（８）、新山山田古墳群（39）、三崎殿山古墳（52）、浅井11号墳、福成春日山古墳などがある。陰田41号墳は直径30ｍの円墳で、若年の女性を埋葬した箱式石棺を有する。新山山田古墳群は10基からなる古墳群で、７号墳からは珠文鏡が出土している。三

崎殿山古墳は全長108ｍの前方後円墳で、西伯耆最大の規模を誇る。福成春日山古墳は全長30ｍ級の前方後円墳で、頭蓋骨を朱塗りした人骨が箱式石棺に埋葬されていた。また、水道山古墳からは斜縁八神鏡、浅井11号墳からは画文帯神獣鏡が出土している。

中期の集落には青木遺跡、福市遺跡、奈喜良遺跡、新山山田遺跡、新山研石山遺跡（37）などがある。

後期には群集墳が造られるようになり、本遺跡の周辺には東宗像古墳群（11）、宗像古墳群（12）、などがある。また、西伯耆地域は横穴墓の隆盛する出雲地方の影響を受けて、６世紀後半に横穴墓の築造が開始される。50基にも及ぶ陰田横穴墓群、大塔山横穴墓群（10）、マケン堀横穴墓群（50）などがあり、これらはいずれも後背墳丘を有するという特色をもつ。

この時期の集落には青木遺跡、福成早里遺跡（47）、清水谷遺跡などがある。

飛鳥～平安時代

この時期の遺跡は法勝寺川西岸と長者原台地に多く分布している。法勝寺川西岸では、陰田遺跡群（24～26、28、31～35）、新山遺跡群（36～38）などがあり、これらはいずれも丘陵斜面を加工して平坦面をつくり、そこに掘立柱建物などを構築している。また、これらの遺跡では鍛冶、製鉄関連の遺構、遺物が検出され、さらに、木簡や円面硯、墨書土器などが出土しており、７世紀後半以降、官衙的性格を有するようになる。また、陰田第６遺跡では石敷道路が確認されており、中海沿岸と内陸部を結ぶ道と考えられている。以上のことから伯耆、出雲国境近くに位置するこの地域は極めて重要な場所であったと考えられる。

一方、長者原台地では法起寺式の伽藍配置をもつ白鳳期の大寺廃寺跡や平安時代の坂中廃寺跡があり、さらに、これらに近接する長者屋敷遺跡（57）、坂長下屋敷遺跡（59）、坂長第６遺跡（60）では官衙的配置をとる大型建物群が確認されており、長者原台地上に会見郡衙が存在していたことが明かとなりつつある。

集落としては青木遺跡、樋ノ口第４遺跡（17）、諏訪西山ノ後遺跡などがあり、樋ノ口第４遺跡からは石帯が出土し、諏訪西山ノ後遺跡では土師器甕に和同開珎３枚、刀子、鋤先、墨挺を入れて埋納した胞衣埋納遺構が検出されている。

中　　世

南北朝から戦国期の動乱を背景として米子市内には石井要害（14）、橋本七尾城（23）、新山要害（43）、戸上山城（９）、飯山城（２）、河岡城、尾高城などが築かれる。『伯耆志』によると、橋本七尾城は守護山名氏の重臣行松氏が在城し、石井要害は片山小四郎が在城し、出雲からの侵攻に備えたという。

古墓は長者原台地で多く確認されており別所長峰古墓（18）、諏訪１号墳（19）、青木遺跡、別所中原地下式横穴（20）がある。別所長峰古墓と諏訪１号墳は、方形の墳丘の周囲に溝を巡らせるもので、墳丘上に宝篋印塔あるいは五輪塔を建てていたと思われる。別所中原地下式横穴では地下式の横穴墓が３基検出された。経塚は長砂町と奥谷で発見されているが、いずれも遺構は不明である。錦町第１遺跡（３）では畠跡が検出されている。

近世・近代

近世の城下町の中心であった米子城は天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐12万石の吉川広

家によって築城が開始されるが、慶長５年(1600)周防国岩国に転封される。かわって中村一忠が同年、伯耆18万石の領主として入城したが、慶長14年（1609）に中村家は断絶し、その後、慶長15年（1610）に加藤貞泰が伯耆国汗入・会見郡６万石を領有し、米子城主となる。やがて元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となり、池田由之が米子城主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると光仲の首席家老の荒尾成利が米子城を預かることとなり、その後、明治２年（1869）まで荒尾氏による自分手政治が行われた。

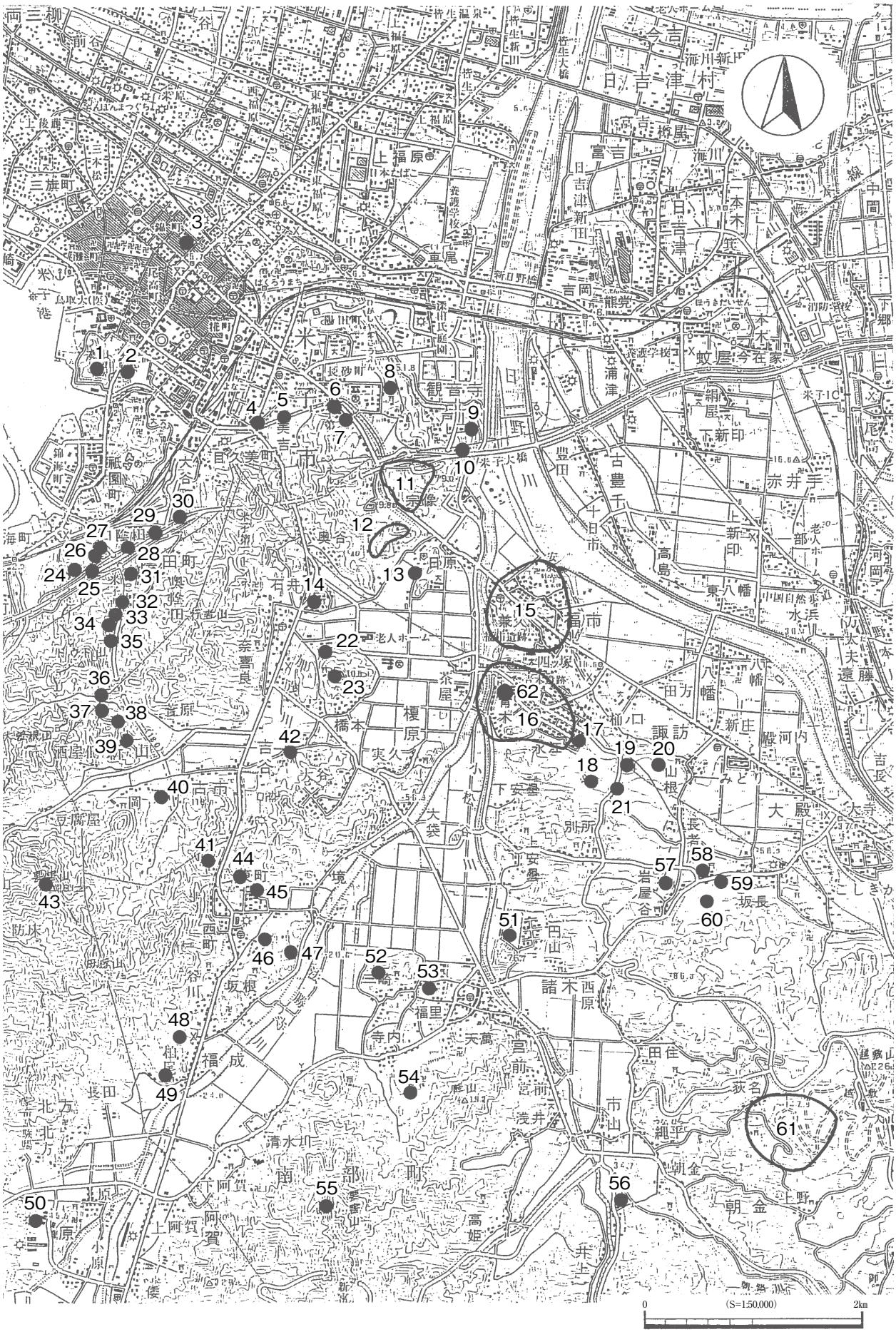
米子市青木は近世には青木村と称した。村名の由来は、地勢から「アワギ」、「アウギ」の転訛とされ、扇村と称したともいわれる。法勝寺川下流の平地は沼沢地をつくりやすい環境のため、集落は同川西岸から中世以後、東岸に移り、一部は近世に再び西岸へ移ったとされる。

元和４年（1618）の検地では田23町７反余、畑６町６反余、家数は宗右衛門・善右衛門以下12軒、拝領高は378石余、本免は四ツとある。元禄９年（1696）の下札では高417石余で、箕浦氏の給地であった。幕末の六郡郷村生高竈付では高445石余、竈数60、『伯耆志』では高446石余、山林18町９反余、家数60、人数268で、藪役銀三匁を課せられていた。丘陵部の畑は幕末の佐野川開通により水田化が進み、安政７年（1724）には新井手懸りの反別11町７反余であった。

青木村は、明治22年（1889）には会見郡尚徳村大字青木となり、昭和29年（1954）には米子市青木となり、現在に至っている。

1	米子城跡	2	飯山城跡	3	錦町第１遺跡	4	目久美遺跡
5	池ノ内遺跡	6	長砂第１遺跡	7	長砂第２遺跡	8	水道山古墳
9	戸上山城跡	10	大塔山横穴墓群	11	東宗像古墳群	12	宗像古墳群
13	日原６号墳	14	石井要害跡	15	福市遺跡	16	青木遺跡
17	樋ノ口第４遺跡	18	別所長峰古墓	19	諏訪１号墳	20	別所中原地下式横穴
21	諏訪西山ノ後遺跡	22	奈喜良遺跡	23	橋本七尾城跡	24	陰田荒神谷遺跡
25	陰田小犬田遺跡	26	陰田ヒチリザコ遺跡	27	陰田第７遺跡	28	陰田第６遺跡
29	陰田第９遺跡	30	陰田第１遺跡	31	陰田宮の谷遺跡	32	陰田広畑遺跡
33	陰田隠れが谷遺跡	34	陰田ハタケ谷遺跡	35	陰田夜坂谷遺跡	36	新山下山遺跡
37	新山研石山遺跡	38	新山山田遺跡	39	新山山田古墳群	40	古市河原田遺跡
41	吉谷銭神遺跡	42	吉谷亀尾ノ上遺跡	43	新山要害跡（長台寺城跡）	44	境北井塔遺跡
45	境矢石遺跡	46	福成石佛前遺跡	47	福成早里遺跡	48	清水谷遺跡
49	丸山固屋跡（小鷹城跡）	50	マケン堀横穴墓群	51	諸木遺跡	52	三崎殿山古墳
53	宮尾遺跡	54	普段寺１・２号墳	55	手間要害跡	56	天王原遺跡
57	長者屋敷遺跡	58	坂長村上遺跡	59	坂長下屋敷遺跡	60	坂長第６遺跡
61	越敷山遺跡群	**62**	**青木宮塔遺跡**				

第１表　周辺遺跡一覧表



第３図　周辺遺跡分布図

第３章　調査の概要

第１節　調査の方法

尚徳２地区単県急傾斜地崩壊対策工事は、平成30年７月の豪雨により、丘陵斜面が崩壊し、その災害復旧工事と崩壊地に隣接する丘陵斜面もほぼ垂直な急斜面となっており、丘陵斜面が災害等により崩壊するのを防止するための工事である。

発掘調査は、工事の対象となる丘陵の縁辺部において実施した。調査地は、幅0.7～1.7ｍと狭く、しかも調査地内を縦断するように段切りや排水用の溝があるため、重機の使用ができないことから、人力で表土及び堆積層の掘削を実施し、遺構の検出と掘削を行った。

調査にあたっては、調査地が狭長であるため、調査区を１～５区に分けて実施した（第４図）。

２区では、調査区のほぼ全域にわたって竪穴建物跡ＳＩ１を検出したが、ＳＩ１は工事による法面よりも深く掘り込まれており、工事の関係上、遺構掘削ができないため、その部分については極力遺構を掘削することは避けた。ＳＩ１の深さや床面、及び床面での遺構の有無を確認するために、調査区の東側と西側の壁際にサブトレンチを設定し、さらにＳＩ１の北側を長さ3.5ｍ拡張して最小限の掘削に留めた。

検出した遺構と遺物の記録には、遺跡調査システムを用いた。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、リバーサルフィルムで撮影した。また、サブカメラとしてコンパクトデジタルカメラも使用した。

第２節　遺跡の立地

青木宮埒遺跡は、米子平野の南部に位置する。調査地は法勝寺川右岸の長者原台地と呼ばれる標高32ｍの丘陵の西端に立地し、眼下には法勝寺川と小松谷川が合流し、西側には法勝寺平野が開ける。

調査地の東側は丘陵を切り開いて造成した大規模な住宅団地（永江団地）となっているが、調査地付近は丘陵を削平して造成した畑地が残る。

丘陵の先端は、法勝寺川の築堤のために土取りが行われており、垂直に近い急傾斜となっている。また、丘陵下の集落内には土取りによって切断された丘陵の先端部が残る（図版１）。

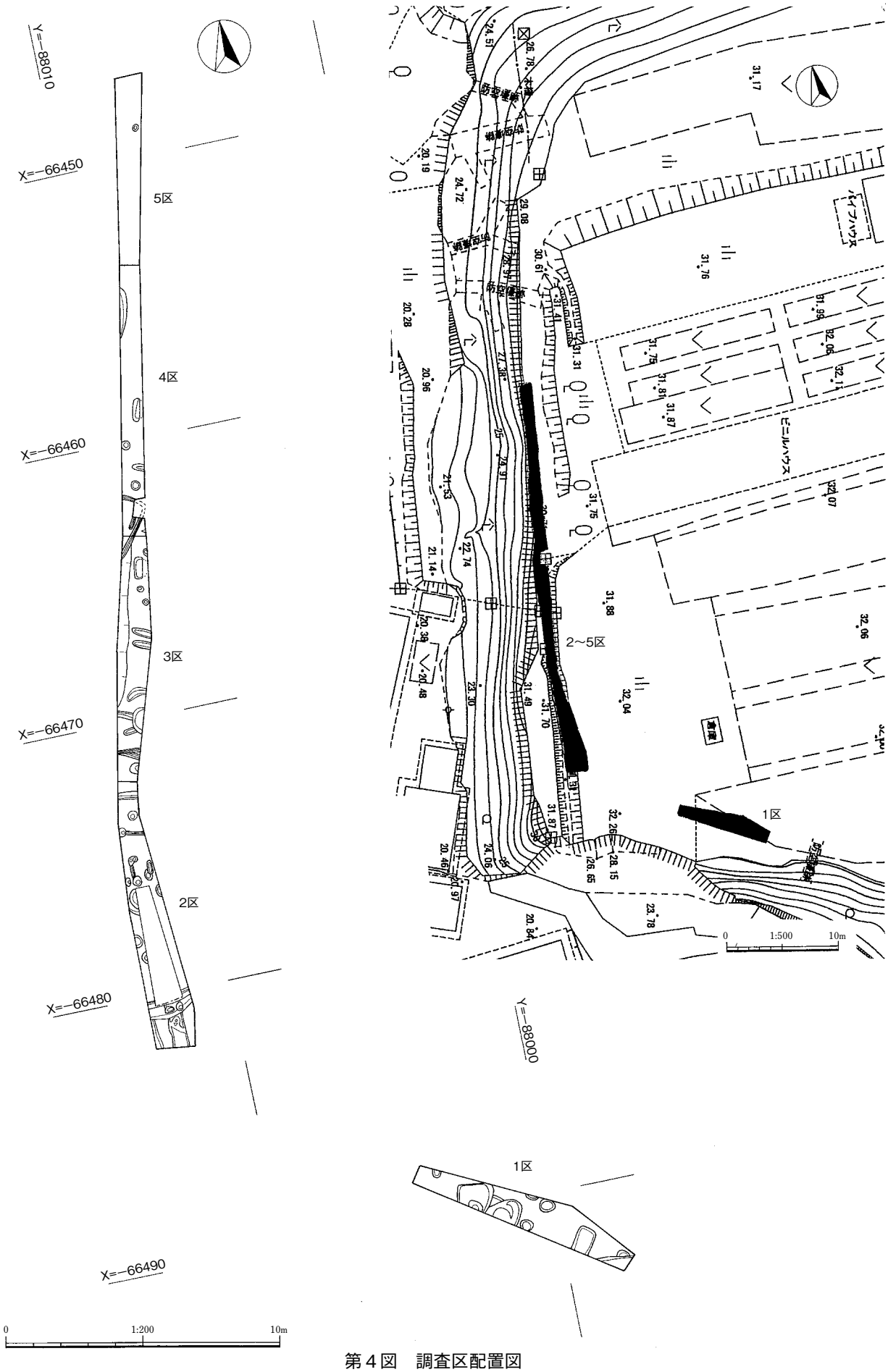
第３節　検出した遺構と遺物

１．１区調査区

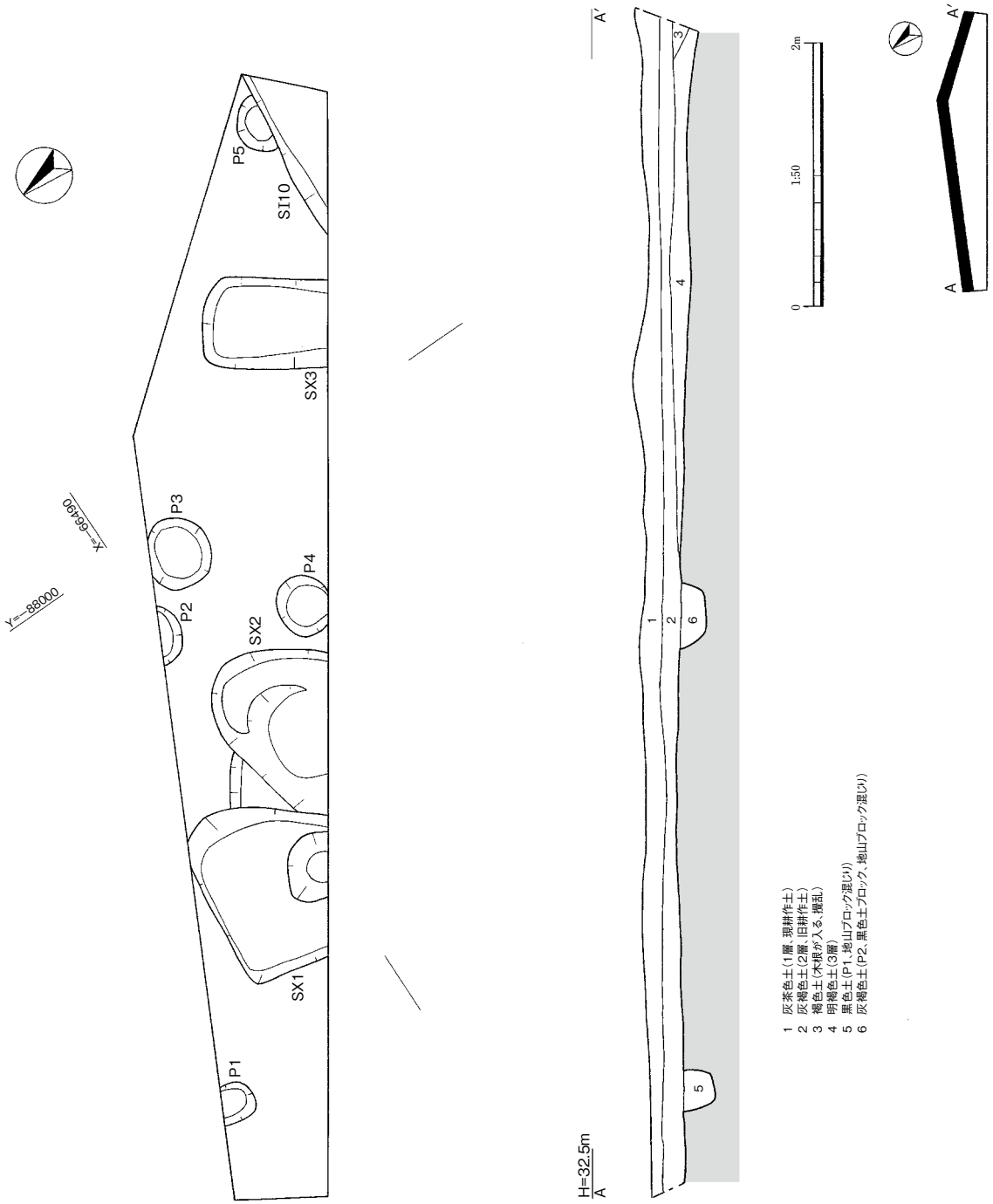
１区は工事対象地の最も南東に位置する北西－南東方向に長い調査区である。

層序は、調査区の北西側では、現地表面から灰茶色を呈する現耕作土（１層）、灰褐色を呈する旧耕作土（２層）、地山となっているが、調査区の南東側では２層と地山の間に明褐色土（３層）が存在する。

遺構は、地山上面で竪穴建物跡１棟、ピット５基を検出した。なお、ＳＸ１～３は、形態的特徴と埋土から梨の木の肥料穴と考えられる（調査地は、以前、梨畑として利用されていた）。


Y=-88010
X=-66450
X=-66460
X=-66470
X=-66480
X=-66490
5区
4区
3区
2区
1区
0
1:200
10m
Y=-88000
2～5区
1区
防空壕跡
ビニールハウス
パイプハウス
0
1:500
10m

第４図　調査区配置図

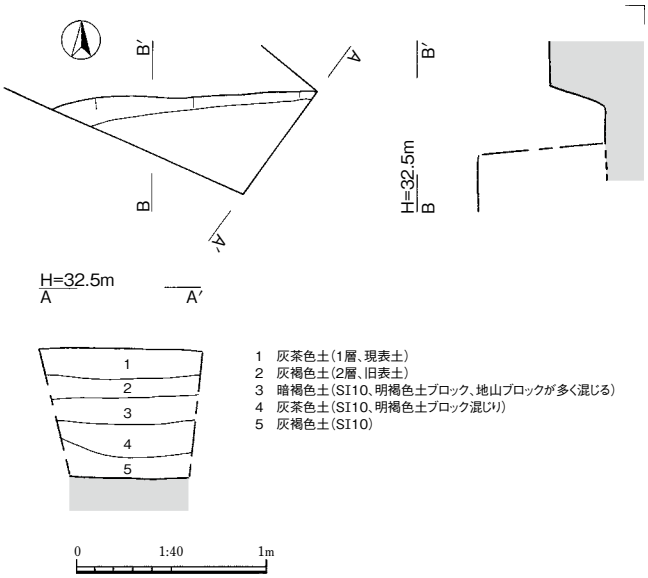

P5
SI10
SX3
P3
P4
P2
SX2
SX1
P1
X=-66490
Y=-88000
A
A′
H=32.5m
1
2
3
4
5
6
0
1:50
2m
1 灰茶色土(1層、現耕作土)
2 灰褐色土(2層、旧耕作土)
3 褐色土(木根が入る、攪乱)
4 明褐色土(3層)
5 黒色土(P1、地山ブロック混じり)
6 灰褐色土(P2、黒色土ブロック、地山ブロック混じり)

第５図　１区　平・断面図

ＳＩ10（第６図）

ＳＩ10は、調査区の南東端で検出した。壁際には壁溝は認められないが、壁面がほぼ垂直に立ち上がることと、堀形が直線的であることから平面形態が方形を呈すると考えられる竪穴建物跡と判断した。規模は、検出した範囲で東西長1.4ｍ、南北長0.5ｍ、深さ0.3ｍを測る。

本遺構の帰属時期は、遺物が出土していないが、平面形態から古墳時代と考えられる。



第６図　ＳＩ10遺構図

２．２区調査区

２区は、１区の北西10ｍに位置する南北に長い調査区である。

層序は、現地表面から褐色を呈する現表土（１層）、淡褐灰色土（２層）、褐灰色土（３層）、地山となっており、３層にはビニールやプラスチックが混じっていることから、３層は畑地の造成に関わるものと考えられる。

遺構は、地山上面で竪穴建物跡１棟、溝状遺構２基を検出した。

ＳＩ１（第８、９図）

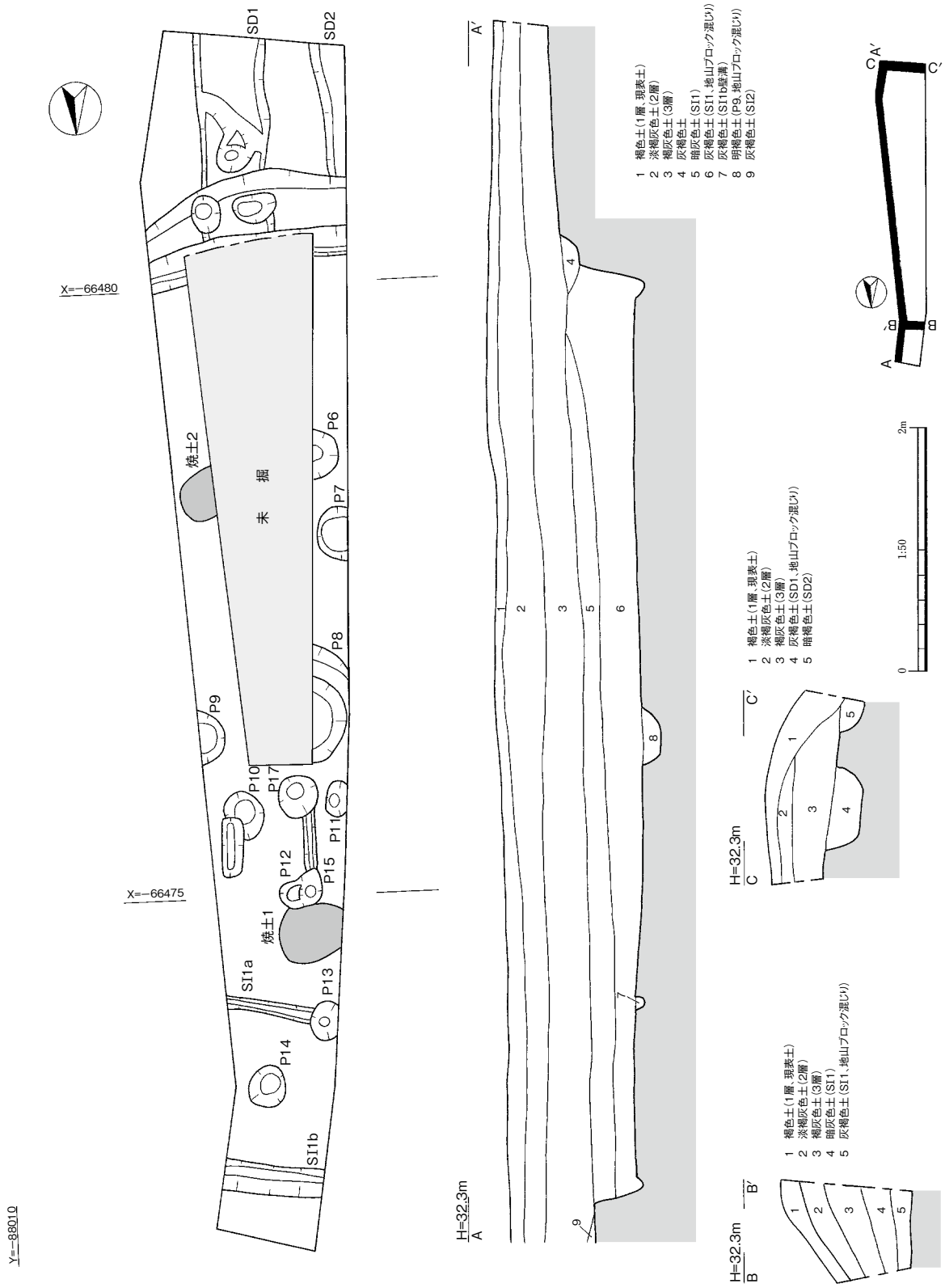
ＳＩ１は、調査区のほぼ全域にわたって検出した。壁溝の在り方から新旧２時期あり、旧期をＳＩ１ａ、新期をＳＩ１ｂとした。

ＳＩ１ａは、北側の壁溝と南側の堀形が直線的にのびていることから、平面形態は方形を呈すると考えられる。規模は南北長6.5ｍ、東西長は検出した範囲で1.7ｍ、深さは南側の堀形で0.55ｍを測る。調査区が狭小なため、主柱穴は確認できなかった。

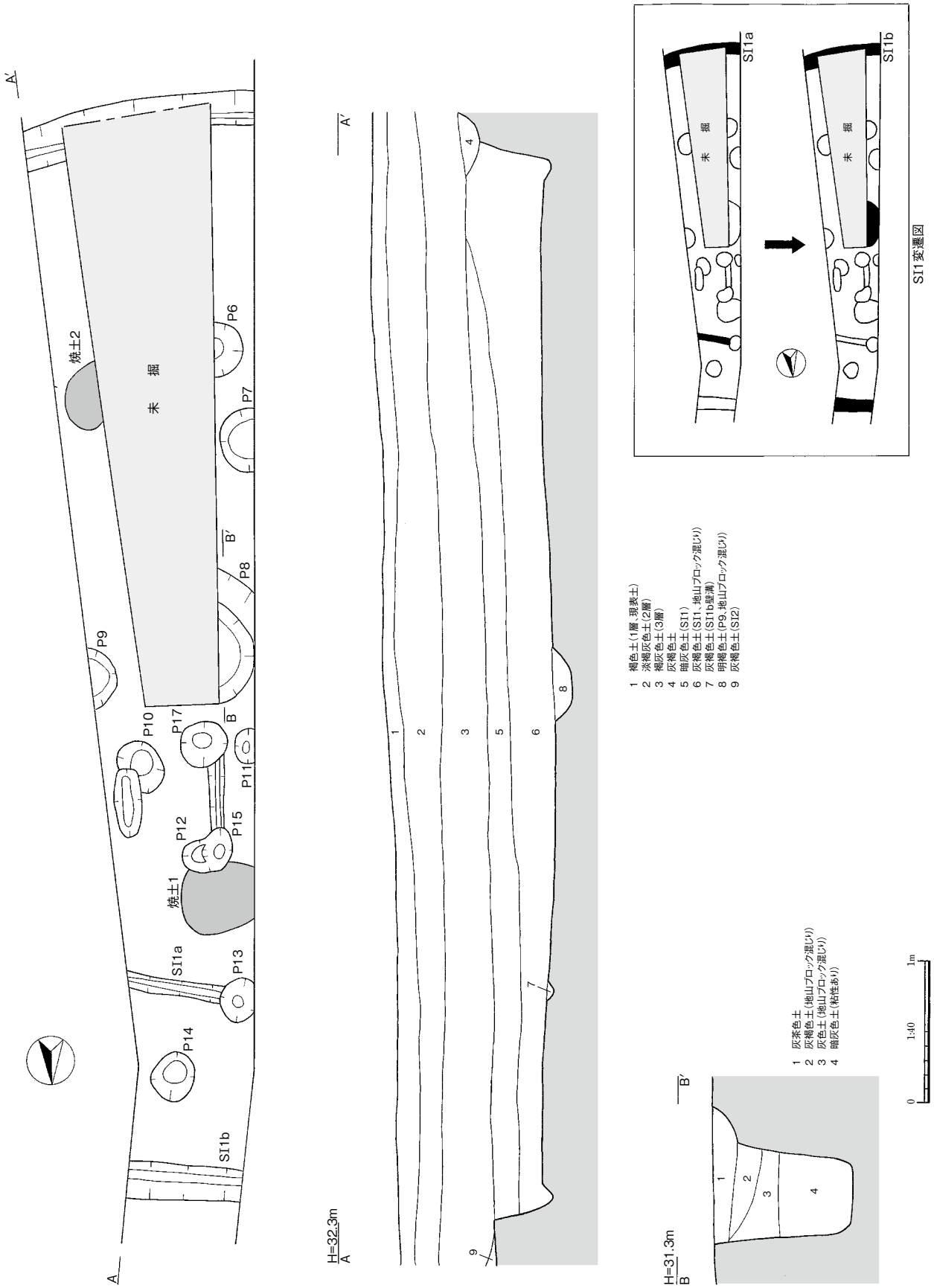
ＳＩ１ｂは、ＳＩ１ａを北側に1.4～1.5ｍ拡張したものである。規模は南北長7.9ｍ、東西長は検出した範囲で1.7ｍ、深さは0.35～0.55ｍを測る。調査区が狭小なため、主柱穴は確認できなかったが、Ｐ８は建物跡の中央に位置することから中央ピットと考えられる。中央ピット（Ｐ８）は、西側は調査区外にかかり、東側は未調査であるが、南側は二段掘りとなっており、規模は検出した範囲で南北径1.0ｍ、深さ1.0ｍを測る。

ＳＩ１からは、弥生土器、土師器、須恵器、石製品が出土した。１は弥生土器甕の口縁部で、端部はやや外傾して立ち上がり、外面には３条の凹線が巡る。２は土師器甕の口縁部である。複合口縁がかなり退化したもので、端部が僅かに外反する。青木編年のⅨ期に比定される。３は須恵器高坏の坏胴部で、口縁部と底部との境界には１条の稜が巡り、その下には波状文と２条の沈線が施されている。４はデイサイト製の有溝石錘で、ラグビーボール状を呈し、長さ2.6㎝と小型で、縦方向に溝が施されている。

本遺構の帰属時期は、出土遺物から古墳時代中期後葉と考えられる。


SD1
SD2
X=−66480
X=−66475
Y=−88010
焼土2
未掘
焼土1
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P17
SI1a
SI1b
A
A′
H=32.3m
1 褐色土(1層、現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 褐灰色土(3層)
4 灰褐色土
5 暗灰色土(SI1)
6 灰褐色土(SI1、地山ブロック混じり)
7 灰褐色土(SI1b壁溝)
8 明褐色土(P9、地山ブロック混じり)
9 灰褐色土(SI2)
B
B′
C
C′
1 褐色土(1層、現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 褐灰色土(3層)
4 灰褐色土(SD1、地山ブロック混じり)
5 暗褐色土(SD2)
1 褐色土(1層、現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 褐灰色土(3層)
4 暗灰色土(SI1)
5 灰褐色土(SI1、地山ブロック混じり)
0
1:50
2m

第７図　２区　平・断面図

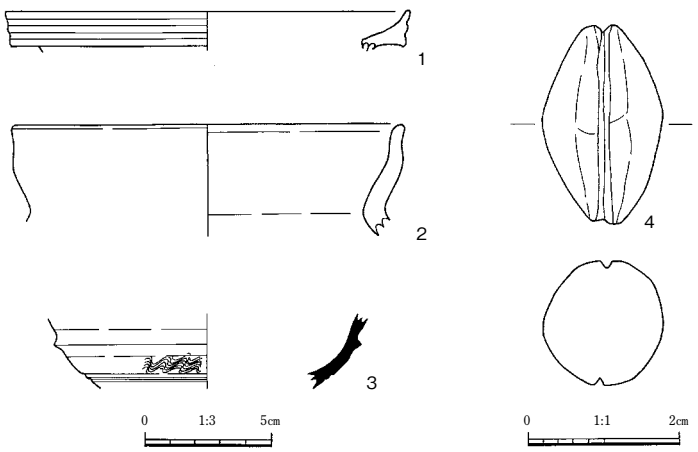

A
A′
B
B′
未　掘
焼土2
焼土1
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P17
SI1a
SI1b
H=32.3m
H=31.3m
1 褐色土(1層,現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 褐灰色土(3層)
4 灰褐色土
5 暗灰色土(SI1)
6 灰褐色土(SI1,地山ブロック混じり)
7 灰褐色土(SI1b壁溝)
8 明褐色土(P9,地山ブロック混じり)
9 灰褐色土(SI2)
1 灰茶色土
2 灰褐色土(地山ブロック混じり)
3 灰色土(地山ブロック混じり)
4 暗灰色土(粘性あり)
0
1:40
1m
SI1a
SI1b
SI1変遷図

第８図　ＳＩ１遺構図

ＳＤ１（第７図）

ＳＤ１は、２区の南側で検出した。南北方向にのびており、規模は、検出した範囲で長さ1.7ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.25ｍを測る。埋土は地山ブロック混じりの灰褐色土の単層で、床面の凹凸が著しい。

本遺構の帰属時期は、遺物が出土していないが、埋土上面にビニールが混じっていたことから、近年と考えられる。



第９図　ＳＩ１出土遺物図

ＳＤ２（第７図）

ＳＤ２は、２区の南側で検出した。ＳＤ１の西0.4ｍに位置し、ＳＤ１と平行して南北方向にのびている。西側の堀形は調査区外に位置すると考えられ、規模は、検出した範囲で長さ1.1ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は暗褐色土の単層である。

本遺構の帰属時期は、遺物が出土していないが、ＳＤ１と平行してのびていることと、埋土の状況が１区のＳＸ１～３に近似していることからＳＤ１と同様、近年と考えられる。

３．３区調査区

３区は、２区の北側に隣接する。南北に長い調査区である。

層序は、現地表面から褐色を呈する現表土（１層）、淡褐灰色土（２層）、褐灰色土（３層）、地山となっており、３層にはビニールやプラスチックが混じっていることから、３層は畑地の造成に関わるものと考えられる。

遺構は、地山上面で竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構８条とピット５基を検出した。

ＳＩ２（第11図）

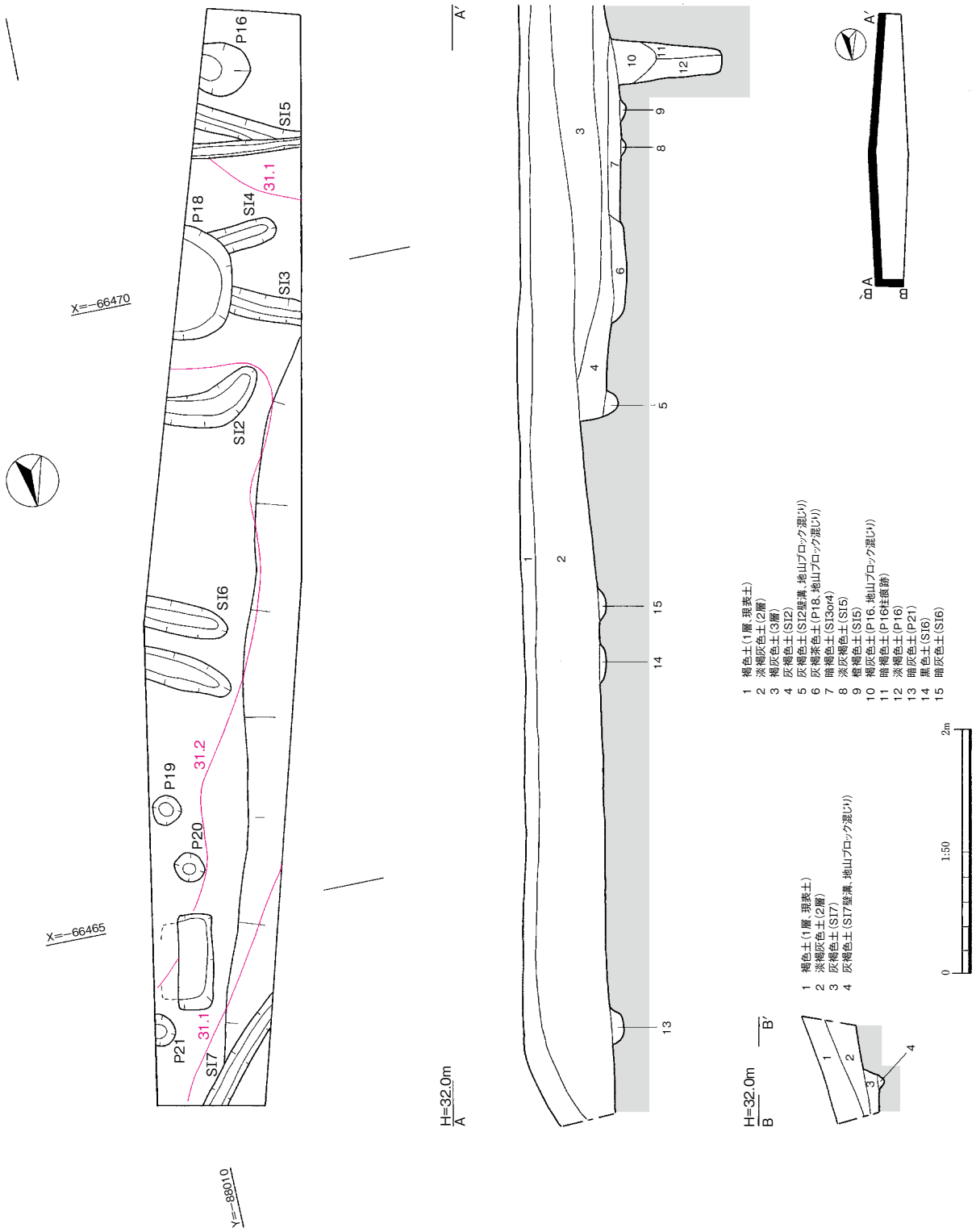
ＳＩ２は、調査区の南側で検出した。調査区中央やや南寄りでＬ字状に屈曲した壁溝を検出していることから、平面形態は方形を呈すると考えられる。埋土は後世の畑地の造成によって削平されているため最下層の灰褐色土が残存するのみである。規模は、埋土の残存状況と壁溝から、検出した範囲で南北長3.7ｍ、東西長0.7ｍ、深さ0.25ｍを測る。

本遺構からは土師器と須恵器が出土したが、いずれも細片であるため、図示できなかった。

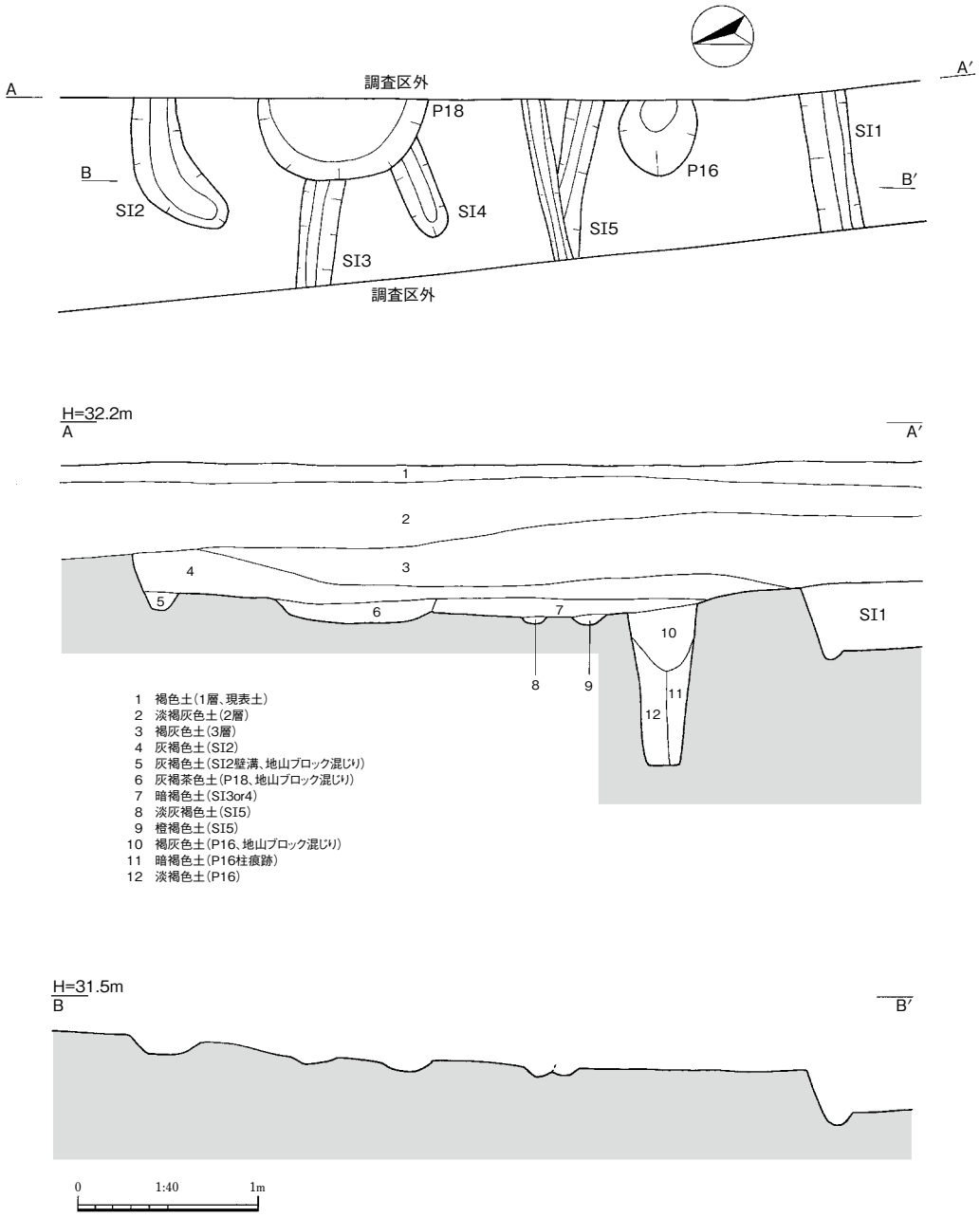
本遺構の帰属時期は、出土遺物が細片であるため特定できず、平面形態から古墳時代と考えられる。

ＳＩ３（第11図）

ＳＩ３は、ＳＩ２の壁溝の南0.4ｍで、北西－南東方向に直線的にのびる竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を検出した。溝状遺構は、南東側はＰ18に切られており、規模は、検出した範囲で長さ0.6ｍ、幅0.2ｍ、深さ５㎝を測る。本遺構からは、遺物は出土しなかった。


X=−66470
X=−66465
Y=−88010
P16
SI5
31.1
P18
SI4
SI3
SI2
SI6
31.2
P19
P20
P21
SI7
31.1
A
A′
H=32.0m
1 褐色土(1層 現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 褐灰色土(3層)
4 灰褐色土(SI2)
5 灰褐色土(SI2壁溝、地山ブロック混じり)
6 灰褐茶色土(P18、地山ブロック混じり)
7 暗褐色土(SI3or4)
8 淡灰褐色土(SI5)
9 橙褐色土(SI5)
10 褐灰色土(P16、地山ブロック混じり)
11 暗褐色土(P16柱痕跡)
12 淡褐色土(P16)
13 暗灰色土(P21)
14 黒色土(SI6)
15 暗灰色土(SI6)
B
B′
H=32.0m
1 褐色土(1層、現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 灰褐色土(SI7)
4 灰褐色土(SI7壁溝、地山ブロック混じり)
0
1:50
2m

第10図　３区　平・断面図



第11図　ＳＩ２～５遺構図

ＳＩ４（第11図）

ＳＩ４は、ＳＩ３の壁溝の南0.3ｍで、東西方向に直線的にのびる竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を検出した。溝状遺構は、東側はＰ18に切られており、規模は、検出した範囲で長さ0.55ｍ、幅0.2ｍ、深さ５㎝を測る。

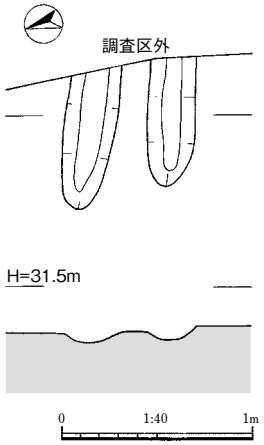
本遺構からは、遺物は出土しなかった。

東壁（Ａ－Ａ′）の７層（暗褐色土）は、北側にＰ18が掘り込まれ、さらにＰ18はＳＩ３とＳＩ４の壁溝を切っているため判然としないが、ＳＩ３あるいはＳＩ４の埋土であると考えられ、土層断面からＳＩ３あるいはＳＩ４は、ＳＩ２よりも古いものと考えられる。

ＳＩ５（第11図）

ＳＩ５は、ＳＩ４の壁溝の南0.5ｍで、東西方向と北西－南東方向に直線的にのびる２条の竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を検出した。東西方向の溝状遺構が北西－南東方向の溝状遺構を切っており、建て替えが想定される。検出した範囲での溝状遺構の規模は、東西方向の溝状遺構は長さ0.9ｍ、幅0.1～0.15ｍ、深さ５㎝、北西－南東方向の溝状遺構は長さ0.9ｍ、幅0.2ｍ、深さ５㎝を測る。

本遺構からは遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明であるが、ＳＩ３あるいはＳＩ４によって削平されていることから、これらよりも古いものと考えられる。



第12図　ＳＩ６遺構図

ＳＩ６（第12図）

ＳＩ６は、調査区の中央やや北寄りで、北西－南東方向に15㎝間隔で平行して直線的にのびる２条の竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を検出した。検出した範囲での溝状遺構の規模は、南側の溝状遺構は長さ0.7ｍ、幅0.25ｍ、深さ５㎝、北側の溝状遺構は長さ0.8ｍ、幅0.3ｍ、深さ５㎝を測る。両遺構の先後関係は不明であるが、建物跡の建て替えが想定される。

本遺構からは遺物は出土しなかった。

４．４区調査区

４区は、３区の北側に隣接する南北に長い調査区である。

層序は、調査区の南側では、現地表面から褐色を呈する現表土（１層）、淡褐灰色土（２層）、地山となっているが、調査区の北側では、現表土直下が地山となっている。

遺構は、地山上面で竪穴建物跡１棟、竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構３条、ピット２基を検出した。

ＳＩ７（第14図）

ＳＩ７は、３区の北端から４区の南側にかけて検出した。床面まで削平を受けているが、Ｌ字状に屈曲すると推測される壁溝を検出した。平面形態は方形を呈すると考えられ、規模は、検出した範囲で南西－北東長2.2ｍ、北西－南東長1.0ｍを測る。南西－北東方向にのびる壁溝の北西側にはこれと平行してのびる溝状遺構があり、建て替えが行われたと想定される。

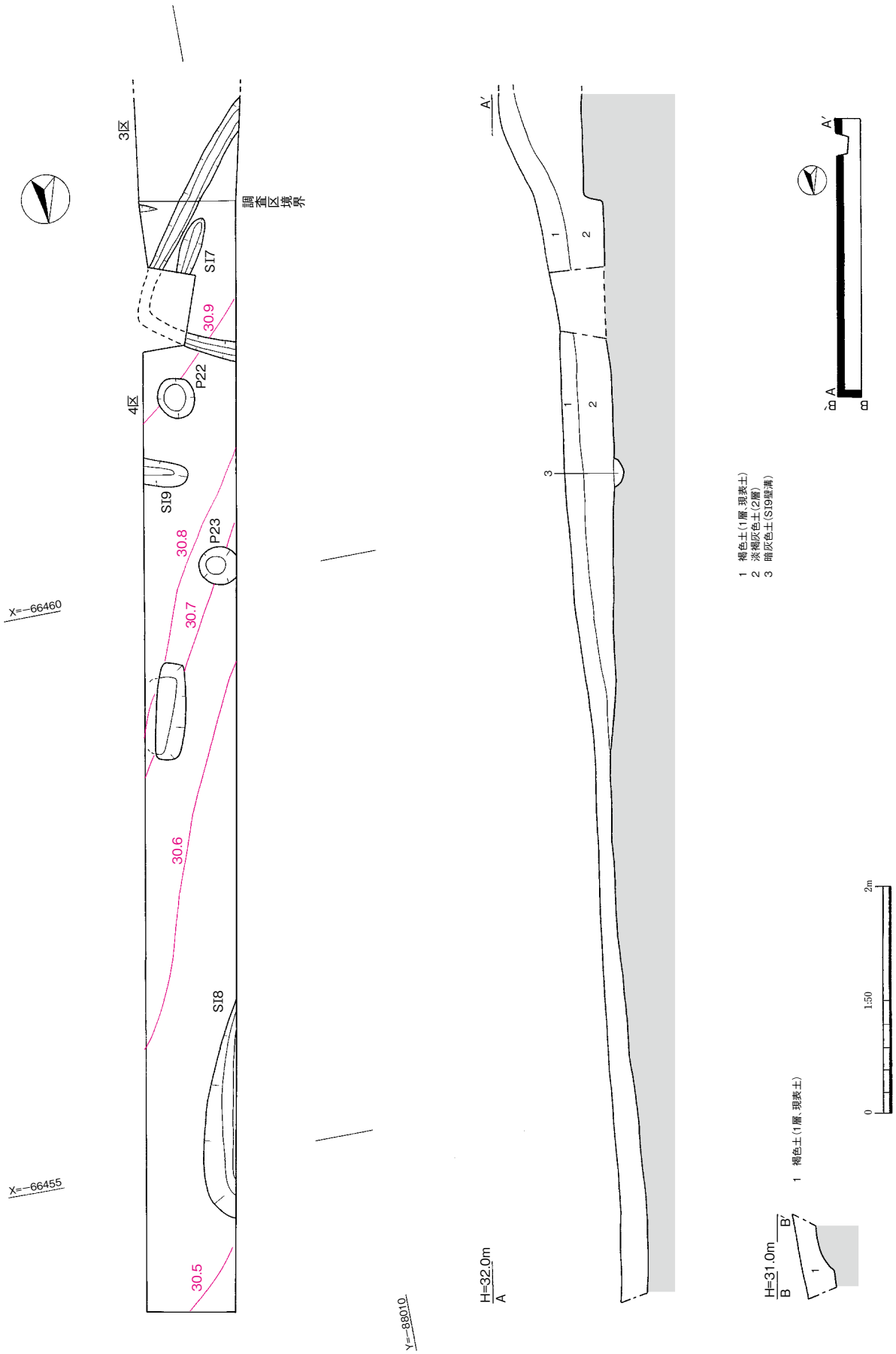
本遺構からは土師器が出土したが、いずれも細片であるため、図示できなかった。

本遺構の帰属時期は、出土遺物が細片であるため特定し難いが、平面形態から古墳時代と考えられる。

ＳＩ８（第15図）

ＳＩ８は、調査区の北側の西壁の壁際で検出した。平面形態は、堀形が屈曲していることから方形を呈すると考えられる。規模は、検出した範囲で南北長1.9ｍ、東西長0.3ｍ、深さ0.4～0.55ｍを測り、壁際には壁溝が認められる。

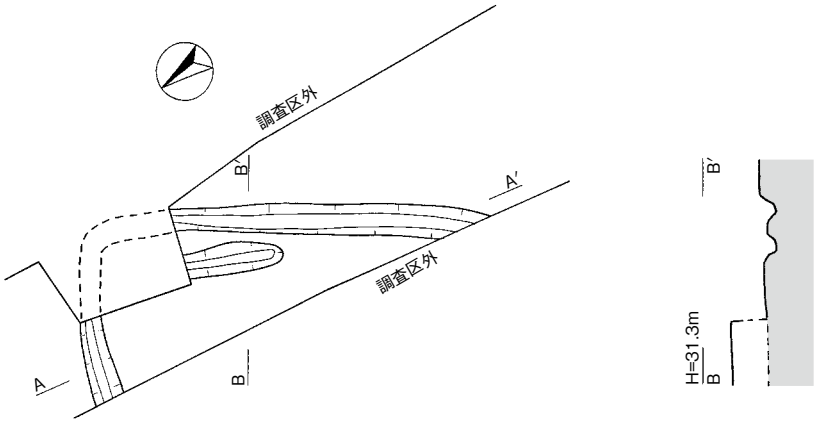
本遺構からは弥生土器が出土した。５、６は埋土の中位から出土したもので、混入したと考えられ


3区
調査区境界
SI7
30.9
P22
4区
SI9
30.8
P23
30.7
X=-66460
30.6
SI8
X=-66455
30.5
Y=-88010
A'
H=32.0m
A
1
2
3
1 褐色土(1層、現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
3 暗灰色土(SI9壁溝)
A'
A
B
2m
1:50
0
1 褐色土(1層、現表土)
H=31.0m
B
B'

第13図　4区　平・断面図

る。５は弥生時代後期の甕の口縁部で、残存している状態で８条の平行沈線が巡る。６は平底の底部である。

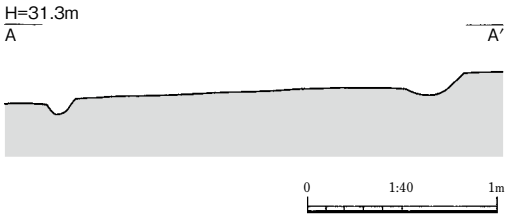
本遺構の帰属時期は、平面形態から古墳時代と考えられる。



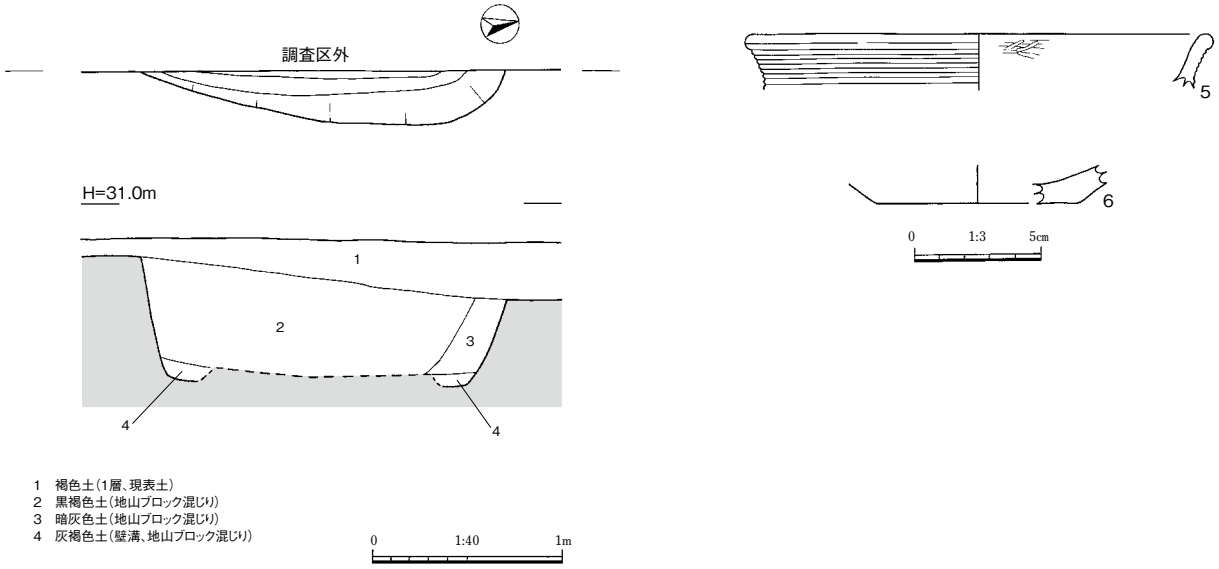
ＳＩ９（第16図）

ＳＩ９は、ＳＩ７の北1.0ｍで、東西方向にのびる竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を検出した。溝状遺構の規模は、長さ0.4ｍ、幅0.25、深さ0.1ｍを測る。

本遺構からは遺物は出土しなかった。



第14図　ＳＩ７遺構図

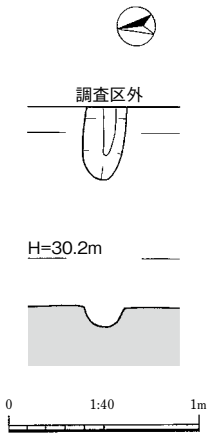


第15図　ＳＩ８遺構図及び出土遺物図

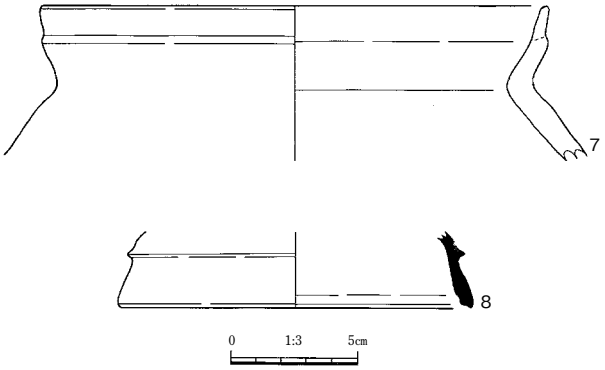
Ｐ23出土遺物（第17図）

Ｐ23は、ＳＩ７の北1.6ｍで検出し、長径33㎝以上、短径35㎝、深さ60㎝を測る。

本遺構からは、土師器甕と須恵器坏蓋が出土した。７は土師器甕である。複合口縁がかなり退化したもので、僅かに段をなす。また、外面には煤が付着している。青木編年のⅨ期に比定される。８は須恵器坏蓋で、口縁部と天井部との境界の稜が鈍いものである。陶邑編年のＴＫ47に比定される。



第16図　ＳＩ９遺構図



第17図　P23出土遺物図

５．５区調査区（第19図）

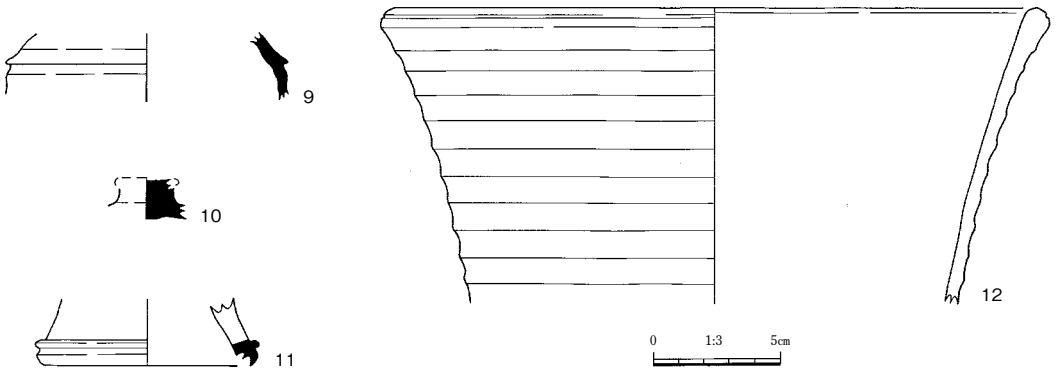
５区は、４区の北側に隣接し、工事対象地の最も北側に位置する南北に長い調査区である。

層序は、調査区の北側では、現地表面から褐色を呈する現表土（１層）、淡褐灰色土（２層）、地山となっているが、調査区の南側では、現表土直下が地山となっている。

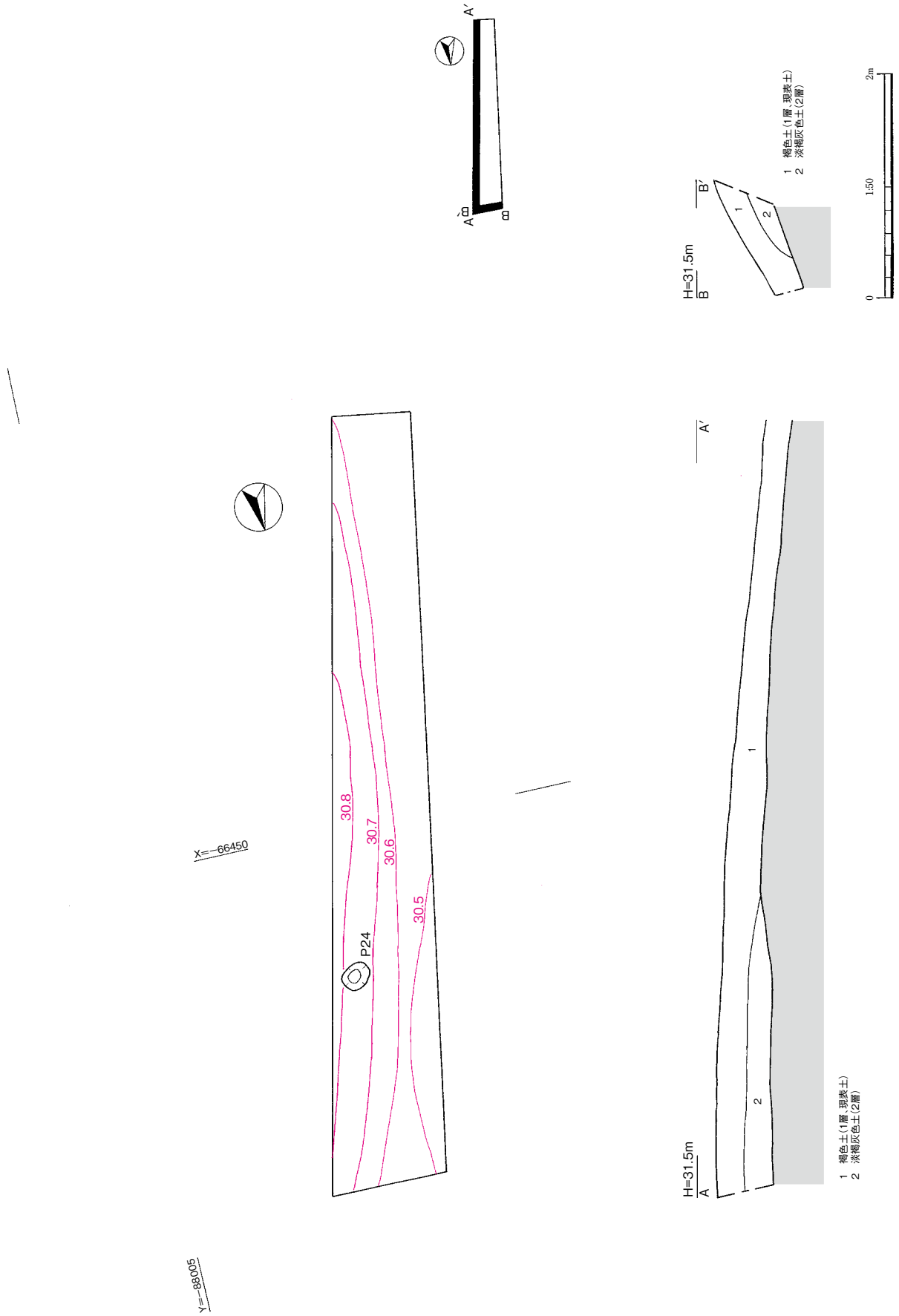
遺構は、地山上面でピットを１基検出したのみである。

第４節　遺構外出土遺物（第18図）

９～11は須恵器である。９は坏蓋の胴部で、口縁部と天井部との境界の稜は鈍く、陶邑編年のＴＫ47に比定される。10は坏蓋のつまみの部分である。11は高坏の脚部で、透かしがある。12は陶器の鉢である。



第18図　遺構外出土遺物図


A
A′
B
B′
H=31.5m
1 褐色土(1層 現表土)
2 淡褐灰色土(2層)
0
1:50
2m
X=−66450
Y=−88005
P24
30.8
30.7
30.6
30.5

第19図　５区　平・断面図

第４章　総　　括

今回の調査は、調査範囲が狭長であるため、各遺構の全体像を認識することができなかったが、竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構も含めると、10棟の竪穴建物跡の存在が想定され、周辺に集落が展開すると考えられる。

竪穴建物跡のうち、帰属時期が明らかとなったものは、２区のＳＩ１の古墳時代中期後葉のみであるが、竪穴建物跡の堀形や壁溝と想定される溝状遺構は、Ｌ字状に屈曲するものや直線的であることから、これらは、いずれも平面形態が方形を呈すると推察される。出土遺物は量的に少ないうえに、細片のものが多く、帰属時期を特定できるものは少ないが、弥生時代後期と古墳時代中期後葉の土器が認められる。性格は不明であるがＰ23から古墳時代中期後葉の土器が出土していることや、竪穴建物跡の平面形態と出土遺物から推測すると、古墳時代中期後葉を主体とする集落跡の可能性がある。

本遺跡は、青木遺跡の西端に位置し、調査地の東側は住宅団地造成工事に伴って広範囲の発掘調査が実施され、弥生時代中期後葉から奈良時代にかけての集落跡などが確認されている。青木遺跡の調査は、丘陵や谷毎にＡ～Ｊ地区に分けられており、古墳時代中期後葉の遺構は、Ａ地区で竪穴建物跡１棟、Ｃ地区で竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡18棟、Ｆ地区で竪穴建物跡５棟、掘立柱建物跡４棟、Ｈ地区で竪穴建物跡１棟、Ｊ地区で竪穴建物跡１棟、掘立柱建物跡１棟が確認されており、この時期、Ｃ地区で主体的に集落が形成されている。

Ｃ地区は、本調査地の南東約800ｍに位置し、その関係が示唆されるが、今回の調査は、狭小な範囲であるため集落の全体像や構造などを明らかにすることができず、Ｃ地区の集落との関係も現時点では解明することはできない。しかし、未調査であった青木遺跡の西端でＣ地区以外ではほとんど認められない古墳時代中期後葉の可能性のある集落跡を確認できたことは、今後、青木遺跡の集落の動向を考えるうえで大変意義のあるものであり、その解明は今後の調査に期待したい。

参考文献

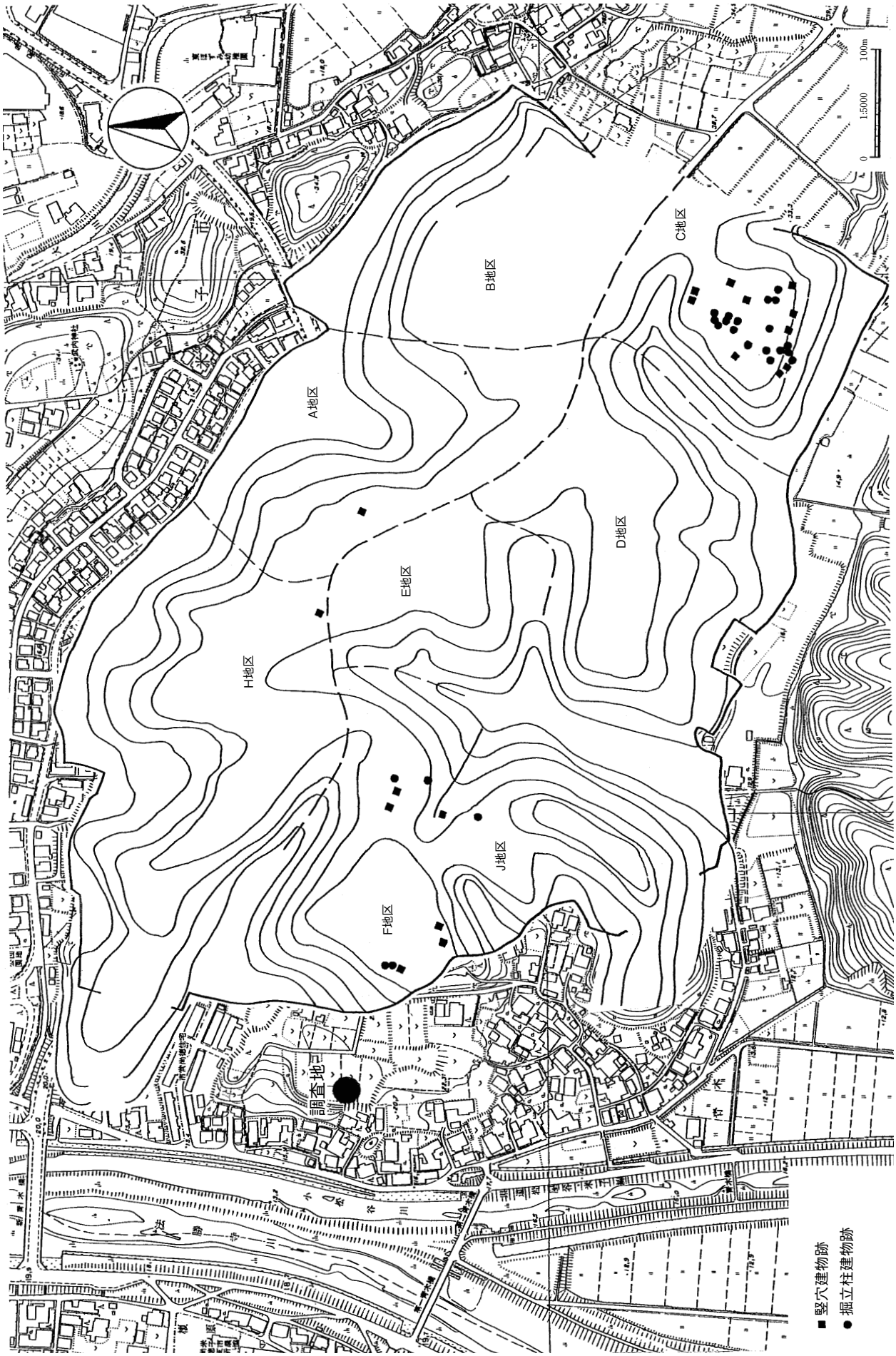
船越元四郎ほか　1976　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』　青木遺跡発掘調査団

船越元四郎ほか　1977　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』　青木遺跡発掘調査団

船越元四郎ほか　1978　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　青木遺跡発掘調査団

米子市編　2003　『新修米子市史』第一巻　米子市

米子市編　1999　『新修米子市史』第七巻　米子市



第20図　青木遺跡の古墳時代中期後葉の遺構分布図

第２表　ＳＩ１出土土器観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
1	9	弥生土器 甕	※ 16.0	—	△ 1.6	外面：３条の凹線、摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	浅黄橙色	
2	9	土師器 甕	※ 15.3	—	△ 4.4	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	浅黄色	
3	9	須恵器 高坏	—	—	△ 3.0	外面：回転ナデ、波状文、２条の沈線 内面：回転ナデ	密	良好	灰黄色	

第３表　ＳＩ１出土石製品観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	重量（g）	石材	備考
4	9	有溝石錘	2.6	1.6	1.6	5.5	デイサイト	縦方向に溝あり

第４表　ＳＩ８出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
5	15	弥生土器 甕	※ 18.0	—	△ 2.2	外面：８条の平行沈線 内面：ミガキ	密	良	灰褐色	
6	15	弥生土器 底部	—	※ 8.0	△ 1.5	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良好	茶褐色	

第５表　P23 出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
7	17	土師器 甕	※ 20.0	—	△ 6.1	外面：摩滅のため調整不明 内面：摩滅のため調整不明	密	良	茶褐色	外面煤付着
8	17	須恵器 坏蓋	※ 13.8	—	△ 2.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰色	

第６表　遺構外出土遺物観察表

遺物番号	挿図番号	出土地 層位	種別 器種	法量（cm） 口径	底径	器高	調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
9	18	３区 ３層	須恵器 坏蓋	—	—	△ 2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	浅黄色	
10	18	２区 ３層	須恵器 坏蓋	—	—	△ 1.6	外面：ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	橙灰色	つまみ部分
11	18	２区 ３層	須恵器 高坏	—	※ 8.2	△ 2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	灰黄褐色	透かしあり
12	18	４区 表土	陶器 鉢	※ 25.2	—	△ 11.6	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	灰黄褐色	

写 真 図 版

調査地遠景（南西から）

土取りによって切断された丘陵先端部

図版2

１区調査前状況（北西から）

２～５区調査前状況（南から）

1 区全景（南東から）

1 区全景（北西から）

図版4

１区土層

ＳＩ10（東から）

２区全景（南から）

２区全景（北から）

図版6

ＳＩ１（東から）

ＳＩ１ｂ　中央ピット（西から）

３区全景（南から）

３区全景（北から）

図版8

ＳＩ２～５検出状況（北から）

ＳＩ２～５完掘状況（北から）

３区及びＳＩ２～５土層

ＳＩ６（東から）

図版10

４区全景（南から）

４区全景（北から）

ＳＩ７（北西から）

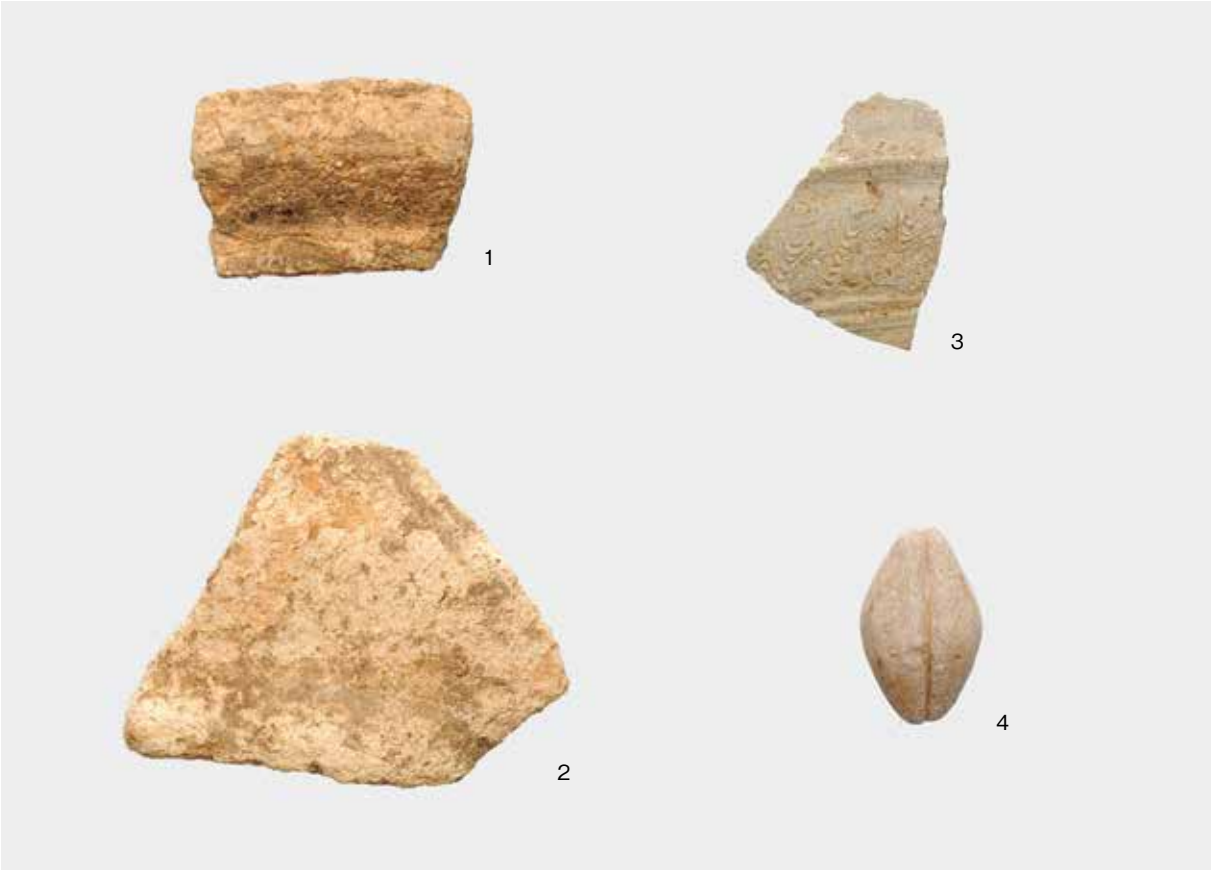
ＳＩ８（東から）

図版12

ＳＩ９（西から）

Ｐ２３遺物出土状況

５区全景（北から）

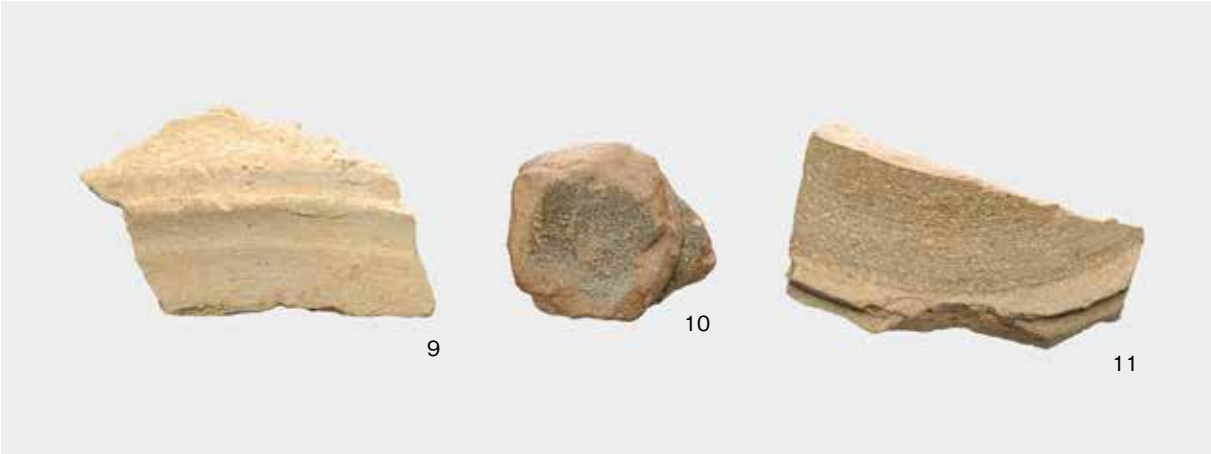


ＳＩ１出土遺物　（Ｓ＝１：１）

ＳＩ８出土遺物　（Ｓ＝１：１）

P23出土遺物　（Ｓ＝１：１）

図版14



遺構外出土遺物（1）　（S＝1：1）

遺構外出土遺物（2）　（S＝1：1）

報　告　書　抄　録

ふりがな	あおきみやさこいせき
書名	青木宮埼遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団　埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	20
編著者名	高橋浩樹
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室
所在地	〒683－0011　鳥取県米子市福市281番地　　ＴＥＬ・ＦＡＸ　0859－26－0455 ｅメールアドレス　yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp
発行年月日	西暦２０２０年３月２６日　　令和２年３月２６日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
青木宮埼遺跡	鳥取県米子市 青木	31202		35度 23分 49秒	133度 21分 52秒	2019年6月24日 ～ 2019年8月9日	200㎡	急傾斜地 対策工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
青木宮埼遺跡	集落跡	古墳時代	竪穴建物跡、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器 石製品	

要　　約

青木宮埼遺跡は、米子市南部に位置し、法勝寺川右岸の標高32ｍの丘陵先端部に立地する。

今回の調査は、狭長な調査範囲であったため、各遺構の全体像を認識することができなかったが、竪穴建物跡の壁溝と想定される溝状遺構を含むと10棟の竪穴建物跡の存在が想定され、周辺に集落が展開すると考えられる。

竪穴建物跡のうち、帰属時期が明かとなったものは、２区のＳＩ１の古墳時代中期後葉のみであるが、竪穴建物跡の堀形や壁溝と想定される溝状遺構は、Ｌ字状に屈曲するものや直線的であることから、これらは、いずれも平面形態が方形を呈すると推察される。出土遺物は量的に少ないうえに、細片のものが多く、帰属時期を特定できるものは少ないが、弥生時代後期と古墳時代中期後葉の土器が認められる。性格は不明であるが、Ｐ23から古墳時代中期後葉の土器が出土していることや、竪穴建物跡の平面形態と出土遺物から推測すると、古墳時代中期後葉を主体とする集落跡の可能性がある。

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書20
鳥取県米子市
青木宮埼遺跡
２０２０年3月
編集・発行　一般財団法人　米子市文化財団
〒６８３－００１１　鳥取県米子市福市２８１番地
ＴＥＬ　０８５９－２６－０４５５
印　　刷　有限会社　米子プリント社